広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	鏡の間
Author(s)	[著者不明],
Citation	児童の言語生態研究 , 2 : 52 - 53
Issue Date	1968-12-20
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045037
Right	
Relation	

鏡の間

この子の中に育っているもの

――五年生、〝生活ノートから〟――

〈七月十四日〉
今日昼ごろ、おかあさんにかみのけをみじかくきってもらった。かみのけをきる音、さびしい音のようだ。
わたしのかお、どんなになっちゃうのだろう。
みっともなくなったらやだな。
おかあさんは、「とってもかわいいよ。」といってくれた。
でも、すこし、さみしいな。

〈七月十七日〉
今日の夜、たかし君が、おとうさんにしかられた。
たかし君かわいそうだな。
でも、こんどのばあいは、たかし君がわるいのだから、しようがない。
でも、わたしは、そうおもいながらもたかし君をおとうさんからかばっていた。
（筆者注　たかし君とは弟のこと）

〈八月二日〉
朝、おかあさんから「おねえちゃん、ひまだったら、かけいぼのまとめやっといてね。」といわれた。「でも、わたしは、あいにくひまじゃないわ。今年は、夏休み帳のほかに、生活ノートもやらなきゃならないし、まだ、いろいろあるから。」とことわったんだけど、やっぱりやらなきゃわるいような気がしました。
わたし、おかあさんにたのまれるとよわいんだなあ。つくづく思った。

〈八月四日〉
昼、ロンを見てふと考えた。
ロンてひまがあればこやでねているけど、ねるってそんなにいいものかな。すくなくともロンにとっては、いいものなのだろう。ロンどんなゆめみてるんだろうな。
きっとたのしくてゆかいなゆめだろうな。

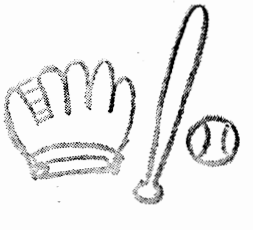
〈九月十九日〉
今日もなんとなくすぎていってしまった。
だけど、今日の隆志君のたいどわたしにはとてもきにくわなかった。
家に帰ってきてもなんにもしゃべらないし、なにをきいてもこたえてくれないからちょうしくるっちゃったな。

〈十月二十八日〉
わたしは、ねどこについて、てんじょうをじっとみているとふとあたまの中にいろいろな人のかおがうかんでくる。
でも、また、わたしひとりぼっちになったりすることがなんどかつづく。
そのうち、人間、いつしかしぬんだな。
わたしもしんじゃうのかな。
なんておもったり、いろいろなことがごっちゃになってあたまにうかんでくる。
そのうち、学校生活をもっとたのしくやってきたかったな。

（42頁からつづく）
ですのに、それに興味を持つというのはちょっと意外なんです。ところがその反響は、私の友だちの子だけでなかったので二度びっくりしたのです。だから子どもの描いたものというのは、何かその絵にはいって行ける何かがあるのでしょうか……。

上原　原物を見てみないからわからないけど考えさせられる話だね。……仮に一枚の用紙に犬なら犬を納めるとするでしょ。するともう一つの観方だからね。だから、おとなだと、その犬を中央におくか、端におくか、端においてその犬が体半分、用紙からはみ出していてもいいのか、そして、画面から切れていても、その犬の全体は子どもに見えるのかどうか、おとなにはわからない。そういうことをわれわれは謙虚に考えてやらねばとさっき言ったんだけど、いまの話は、描き手が子どもでしょ。だから、子どもが自由に自然に筆をとったものだとすれば、それ以下の年令の子どもたちには抵抗が少なかったかもしれないと言えるね。
次はそうした絵から絵本というのは、絵の綴じ合わせでしょ。だから二つにわかれるわけでしょ。そうしたら、二つにわかれるものを、こっちの絵と、こっちの絵とがどんなぐあいにつながらせておいてやることが、対象とする子に一番合っているのか、じゃその場面を、めくった。すると前の場面がどの程度消えかかって、どの程度生きていて、次の場面とつながっているのか、もうその問題を発展させると、すぐ金城さんのシナリオにきちゃうと思うんだ。そういう研究がほしいねえ。

郷右近　やっぱり切断と継続ということですか…（後略）



なんだか、おなじことをくりくえしやっているようなきがしてきて、あした、学校でどういう生活をすれば学校時代の思いでになるかなと考えてしまう。

◆参考に、この子の四年生時の創作童話を紹介します。最初の出だしはあらかじめ示した。◆

おじいさんと白くま

むかし、むかし、ある所に、心のやさしいおじいさんがすんでいました。（提示文）

ある雪のふる日、雪の中にたおれていた白くまの赤ちゃんを見つけました。

よく見てみるとちいさいからだでいっしょうけんめい冬のさむさからのがれようとしています。おじいさんは見るに見かねてその白くまの赤ちゃんを自分の家につれてかえりました。おじいさんの家には、いままでにかわいそうだと思って自分の家につれてきた動物がたくさんすんでいました。どうして自分の家にかわいそうな動物をつれてくるかというのは、おばあさんにさきだたれ自分の息子は戦争で死んでしまったので一人ぼっちでさみしかったからなのです。それにおじいさんは動物がだいすきなのです。それでかわいそうな動物を見ると自分の家につれていくのでした。その動物の中でも、雪のふる日に雪の中でみつけた白くまの赤ちゃんをたいそうかわいがっていました。

それでもねるときみんないっしょにおじいさんのふとんの中にはいってみんないっしょにねていました。それなのでふとんの中はいつもあたたかかったのです。おじいさんのかわいがっている白くまの赤ちゃんはだんだんせいちょうしていき、だくとずっしり重くなるようになりました。そうしたある日のことでした。おじいさんがむりなしごとをしたのでおじいさんはねこんでしまった時のことです。

あいかわらずおじいさんの家の中はにぎやかでした。白くまの赤ちゃんがまりにじゃれていました。するとそのまりがいろりに、はいってしまい白くまの赤ちゃんが頭をいろりにつっこんだひょうしに、いろりの中のおゆがひっくりかえりそうになりました。するとおじいさんが〝あぶない〟というばかりに白くまの赤ちゃんの上にかぶりかかりました。するとおじいさんのからだにあついおゆが、かかっておじいさんはおおやけどをしてしまいました。けれども、白くまの赤ちゃんは、なにもなかったようなかおをしていました。

おじいさんは病気のうえにこんどのやけどをしたためいのちが、あぶなくなってきました。けれども、おじいさんは動物のかんびょうにより、また、動物たちとなかよく、くらすことができるでしょう。そして白くまの赤ちゃんは、にどとこんなおそろしいことをしないでしょう。

[redacted]

・報告者　横浜市立上瀬谷小教諭

◆編集後記◆

☆第二号が世に出る。喧騒の世の中にではない。健やかさと豊かさがこの世のどこかに生きていないはずはない。大人の生きる姿勢が抵抗・拒絶を思わせても、子どもの生きる姿に柔軟・円滑を思わぬ人はあるまい。

☆創刊号編集後記のT氏は、編集中、それは祈りのようでもあり、まぼろしのようでもあったという。まことに本誌は幼きものへの愛着から発しなければならぬ。それは見下ろされるべき愛着ではなしに、生きる姿への接近と執着と思い返される。

☆指導要領は改訂された。現場の国語教育も様子をおいおい改めて行くことだろう。しかし、変って変らぬことをしない対象と、その対象の捉え方がわれわれ同人の求めているものなのである。われわれの目という尺度に不確かさをもし思う人があらば、むしろ謙虚に本誌が〝言語技術指導〟の名を捨て、〝言語生態〟の調査から始めたことを思うべきである。〝生態〟の概念の中には〝環境〟が含められる。しかしこの〝環境〟は物理的空間を意味するものではなくて〝生命現象〟としてのそれである。もちろん、われわれの目もまたこの時〝環境の主体化〟の光を帯びていなければならぬが――

☆災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候　死ぬる時節には死ぬがよく候　是はこれ災難をのがるる妙法にて候

―良寛―

三条大地震時の彼の書翰の一節である。いま大愚良寛の哲学は関係ない。だが、ここに良寛の言語生態が見える。

☆みんなのかお、ちっと、ちがってきたね。どうしてなの？　なつやすみだったから？　だけど、やっぱり、ひろしちゃんは、ひろしちゃんの　かおで、あいこちゃんは　あいこちゃんのかおなんだね。だけど、やっぱり、ちがうみたい。

――ちがうぼくととりかえて

清水えみ子著――

良寛と幼稚園児を比べる、また故なしといわんや。

☆「創刊号合評会記事」（担当者額賀淳子氏・丹野しげ子氏）と「一、二、三年生における連想の発達（その二）」松原俊一氏との原稿を本号に紙面の都合で掲載できず、その努力に報いられなかったことを深くおわびする。（Y）（T）

昭和四三年一二月一五日印刷昭和四三年一二月二〇日発行／**児童の言語生態研究**二号／**三〇〇円**／発行所・児童の言語生態研究会／東京都町田市玉川学園六ノ一ノ一／玉川大学教育学科研究室付／振替東京五九一〇五／印刷・幸和印刷株式会社／東京都新宿区弁天町一